

動物のモグラは、頭は尖り目が小さい。

四肢も尻尾も短い、手と爪だけは大きくてショベルのような形をしている。それで地中に複雑な長いトンネルを掘り、ミミズや昆虫の幼虫を食べて生息している。

馬力はあるが大食漢で、半日も食べないでいると、たちまち死んでしまう。

無器用な一徹者だが、炭坑の坑内屋も習性的には動物のモグラと大差ない。

昭和三十五年（二十三歳）、私は心ならずも坑内屋になったが、昭和二年生まれのモグラは無器用なうえにも破滅的で、石につかえては生爪ばかりはがして悪戦苦闘していた。

十年も過ぎると多少は目はしがきく喧嘩上手になったが、モグラ泣かせの厄介な石は、いつ、どこに転がっているか分からない。

昭和三十五年二月二十四日、深夜。

私は、同じアパート住人の阿部宅で、主務者仲間と隠れ麻雀に熱中していた。

事務屋ならともかく常磐の坑内技術職は、麻雀は半ばご法度だ。技術上層幹部が揃って石部金吉で、

酒は大目に見るが、賭け事はもってのほかと気嫌いしていたのである。

社宅は私的な情報も上に筒抜けで、麻雀で担当現場の事故におくれた先輩が、たちまち出世コースから転落したという前例がある。とにかく事故発生時の現場到着順位は成績評価の最たるもので、主務者以上の中堅技術者は、常時待ちの姿勢でいなければならなかったのである。

そんな禁忌を破って、隠れ麻雀に凝りだしてから半年になっていた。梯子酒や武勇伝がつきものの性質の悪い酒飲みよりは、よほどまじだろうと衆議一決したのである。

特に、採炭事務所で振る舞われる月に二度の間取り（出来高集計）酒が、悪い酒の呼び水になっていた。三々五々、町に流れるのが癖になって家庭内物議をかもし、女房どもの愚痴や口情が絶えなかったのである。

血気盛んな連中だから、ただで済む訳がない。付け馬を従えて大威張りで戻る者もいれば、中には与太者と派手な立ち回りを演じてくるものもある。そのため女房どもの多くが、間取りアレルギーに陥ってもいた。

女房の愚痴ほど、聞きづらいものはない。

品行最悪の私持て余して、有志に、

「少し危えが、家庭麻雀に鞍替えすつか」と、こっそり提案した。

すると、これも女房泣かせの阿部が、

「そりゃいい。健康的で、一石二鳥だわ」

と、すぐ乗ってきて、話は即決した。

言わば、酒にからむ女房たちの愚痴と苦情が、隠れ麻雀に結びつけたのである。

初めは口の固い有志だけでひっそりと囲んでいたが、蛇の道は蛇、すぐ同好者に知れ渡ってメンバー編成に事欠かなくなった。

そのうちには品行方正で鳴る堅物までが割り込んできて、私らを勢いづけた。

町に流れる悪癖はびたりと止み、女房たちは喜んで宿を提供してくれた。知ってか知らずか、上層部は何も言っていない。それに味をしめて、最近では飯業所入口のこのアパートの住人宅を持ち回りにして、三日にあげず打ちまくっていたのである。

平日はいつも十時までと切って始めるが、そんな刻限など守られたためしがない。鳴り音ひそめていたのも初めのうちで、このころはなんとも柄の悪い騒々しい麻雀になっていた。

その夜も、とうに刻限は過ぎていた。

阿部が大負けに負けて、「このままでは帰さねえぞ」と、かっかしていたのである。

私も負けこんでいた。無論、異存はない。

阿部の階下に住む若松は下手の横好きで、時間などお構いなし。ねじり鉢巻きで、「おう望む所だ」と、目も腰も据っていた。

一人勝ちの野地智^{さとし}だけが、口をもぐもぐさせて終バスの時間を気にしていた。彼だけが隣町の内郷社

宅の住人だったのである。

野地は秋田鉱専同期の堅物で、モグラの名に恥じぬずんぐりもっこりタイプ、おまけに強度の近視でどる癖がある。だが麻雀ばかりは口八丁手八丁、人一倍憎まれ口を叩いて稼ぎまくる。堅実なうえに勝負度胸がよく、なんともやり難い相手だ。

阿部は気っ風がいい男伊^{だて}達。六尺の長身を少し猫背にしてひょうひょうと入坑する後ろ姿は、愛嬌があつて憎めない。誰からも好かれる好人物で、炭坑^{やま}にこれほどすんなりと融けこんでいる者もない。麻雀はいつもトップかどん尻^{ケツ}で、勝ちつぶりも負けつぶりもいい。万事に派手なのである。

若松は通称呑ん兵衛松、やつと麻雀の醍醐味^{だいご}をおぼえた晩生^{おくで}である。でっぶりした巨体に似ず、ちょこまかちょこまか稼いで、みんなのペースを乱してばかりいる。阿部が、

「先輩の癖に、思いやりのかけらもねえ」

と、しきりにぼやいていた。二人とも盛岡工専出で、阿部が一年後輩なのである。

入社順では若松、阿部、そして野地や私と続くが、年齢は若松と私が同じで、阿部が昭和三年生まれ、野地が五年の生まれである。

だが、そんな年の差や先輩後輩のけじめなどは、麻雀を囲めば吹っ飛んでしまう。

終始、阿部はついていなかった。

「ええい、こうなりや破れかぶれだ。女は愛嬌、男は度胸。これが通れば大満貫だあ」

最後の最後は、焼けのやん八だ。捨て牌^{パイ}を頭上高々と振りかざして、すでにテンパイしている野地を

はったと覗みすえた。

野地たるや落ちついたもので、すかさず、「どうぞどうぞ、飛んで火に入る夏の虫、またいただき。こっちも満貫でござんすよ。さあさ、いらっしやい、いらっしやあい」と、手招きして軽くいなした。

阿部もさすがにひるんだ。折角振りあげた拳も、立ちこめる紫煙の中で貧乏揺すり。そのとき、阿部の背後で、電話の呼び出し音がけたたましく鳴りだした。

「……………?!」

深夜の電話ほど、ぞっとするものはない。

一瞬、はたと時間が止まった。阿部が大きくのけぞりながら、受話器をわしづかみにしていた。

「ハア、ハイ、そうです、阿部です……………」

彼の現場からではない。彼が慌てて正座した様子では、どうやらお偉方のようなのだ。

私ら三人は首をすくませ、息を呑んだ。阿部も、物音立てるなと目で制していた。

柱時計は、十一時三十分を指していた。

「ハア、野木さんですか？　ハイ、ノーさんなら、いま、ここにいますけど……………ハイ」

「……………?!」

私は、ぎよっとなった。

「よお、磁長だ、山田磁長からだぞ」

阿部が受話器を押さえて、私を呼んだ。

怖さ半分、後ろめたさ半分、私はおずおずと阿部から受話器を受け取った。

「おう、野木君か……………。湯長谷立坑で重大事故が発生した。迎えの車を向けるから、すぐ来てくれ！　くわしい事は、来てから話す」

頭ごなしの、そっけない命令口調だ。

電話は、一方的に切られてしまった。

「なんだ、なんだ？　なにがあったんだ」

「どうしたんだ、人身事故か!？」

「なに、湯長谷立坑？」

みんなが一齐にわめいたが、どんな事故なのか見当もつかない。ましてや管轄ちがいの西部磁で、その所在すら分かっていない。

「とにかく大変らしい。行ってくらあ」

私が腰を浮かすと、若松が、「佐々木さんもついてねえなあ」とつぶやいた。

立坑主務者の佐々木は彼の一年先輩で、後ろの棟のアパートに住んでいる。酒や麻雀とは全く無縁の、愛想のない縮まり屋だ。

「佐々木よりは、私はその上司の松岡係長の方が気になった。磁専の七年先輩なのである。」

「立坑は、ノーさんの専売特許だもんな。だから呼ばれたんだっぺ。きつとそうだよ」

阿部が、したり顔で私を持ちあげた。

立坑は、たった一本しか掘っていない。

専売特許だなんて大げさだが、考えられるのはそれしかなかった。常磐広しといえど、立坑経験者は希少価値だったのである。

「何が何だか、さっぱり分かんねえよ」

私はあたふたと飛びだしたが、背中に、

「氣い、つけろよなあ、無理すんなよ」

「ご苦労さん、ご苦労！」

「今日の勝負は、なしにすっからなあ」

と、三人三様の励ましが、ごっちゃになってかぶさってきた。

4

辰の口社宅は入山炭鉱以来の古い職員住宅で、鉱業所入口の国道沿いにあった。

実際のコの字型のひな壇には、鉱業所長をはじめ部長や鉱長級の戸建て住宅が並び、その膝下に課長や係長級の二戸建て平屋が序列順に整然と配置されていた。

それら上級職の居住ブロックに隣接した一角の、四階建て鉄筋コンクリートアパート（戸数24）の四

棟に、私ら平職員が収容されていた。上級職の住宅には温泉の内風呂とガスストーブがついているが、平職員は共同風呂で、間取りもせいまい2DKだった。

このころでは鉱員たちも同じつくり、同じ間取りのアパート住まいである。ただ職員アパートの畳には、安っぽい布地の縁がついていた。それがかつての職員さまの権威とやらを、辛うじて取り繕っていたのである。

鉱員の地位や処遇は飛躍的に向上したが、職員の場合は旧態依然として、シビアナ封建的階級性を感じがらめに縛られていた。

すなわち役職とは別に職員の身分は、雇員見習い、雇員（係員級）准社員（主務者、つまり主任級）、社員（係長級）、参事（鉱長や鉱業所の課長級）の五段階に細分化されて、昇格人事も学歴優先、年功序列型の官僚主義的形式主義で律せられていたのである。

学卒は入社後一年ほどの見習い期間を経て雇員に昇格するが、一般で言う係長になるには大学卒で十年以上、旧高专校卒で一五年ほどかかる。私の場合は八年も三交代係員をしたあと、やっと準社員の主務者（一般会社でいえば主任）になった。

主務者になると家に社内専用電話がつく。会社人生の前半はその電話と、常一番（昼間勤務）という世間並みの暮らしを目標に、三交代という苦難の変則勤務に耐えていたようなものである。

生と死が隣り合わせの坑内現場では雑念も湧かないが。私たちの修羅の妄執が渦巻く社宅では、嫌というほど平職員の悲哀をなめることが少なくなかった。

四軒長屋から、新築アパートに集団入居したときがそうだった。女房たちが職員クラブの大広間に集められ、庶務係長が職階や給料順に名を呼びあげ、次々に住居を選ばせていったのである。低所得者にとってこれほど惨めなこともない。人権無視もはなはだしいが、それを権力者や上級職の夫人たちが高見の見物をしていたというからおぞましい。

階級が別なだけで、私の住居は若松宅と背中合わせの二階にあった。

麻雀から戻った私がノブに手をかけるより早く玄関ドアが内からあいて、妻がそそくさと迎え入れた。た。

「どうしたの、また何かしでかしたの？ 山田さん、えらく不気嫌な声だったわよ」

妻は、権力者の声におびえていた。

留守と聞いて、磁長はむっとしたのだろう。彼女は全く的はずれの取り越し苦労して、身も世もなく私を待っていたのである。

実は一カ月前の間取りの酒席で、私は心ならずも磁長と衝突していた。上層部の対労組姿勢の甘さやひ弱さをほやいたのが、運悪く聞きとがめられてしまったのである。

そもそも主務者主体の無礼講だ。かつ磁長は気紛れな飛び入りで、そんなほやきぐらいで怒りだすとは思っても寄らなかつた。

「組合と喧嘩して何の得があんだ!? だいたい君は、組織人としての思慮が足らんぞ」

頭ごなしの一喝だ。

黙っていたら済むのに、つい私も、

「事勿れ主義では、奴らはつけあがるだけ」と、やり返してしまつたのである。

それが、火に油をそそぐ結果となつた。

磁長が「なにィ」と叫ぶなり、席を蹴って私に迫ってきた。彼はなかなかの偉丈夫で、上背もあれば肩幅も広い。

私はその見幕に驚いて腰を浮かし、本能的に防戦の身構えをとつた。

磁長も本気と見てとつたのか、主務者仲間がわらわらと二人の間に割って入り、私はたちまち事務所の隅に押しやられた。

阿部と若松が、いきり立つ磁長の前で衝立てとなり、まあまあ、となだめていた。

そのまま私は、定年間近の副課長（磁長代理）に引きずられるようにして帰宅した。そして妻の前で、「なんぼなんでも、程度つてのがあつべ」と、こんこんと説教されたのである。

磁長は四十歳だが東大卒の重役候補で、かつ磁業所長の娘婿である。権勢並ぶ者なき彼に楯突く者は、まずいない。阿部ら仲間も、「なんぼなんでも」と、一様に呆れていた。

あつという間の一瞬のハプニングだった。磁長もだいぶ酒が入っていたようだ。虫の居所も悪かつたのだろう。

翌日、どうもと言つて頭を下げると、彼は何も言わずニヤリと笑つてうなずいた。

それで済んだとは思っていないが、こだわっていたらきりが無い。忘れるともなく忘れていたが、その後遺症は妻側に多く残った。

なにしろ、磁長夫人も社宅最強の女ボスとして、女社会に君臨していたのである。ましてや妻は、夫人と色も柄も全く同じ着物で鉢合わせしたことがあり、その親衛隊の女房から手ひどい洗礼を受けている。磁長夫人が柳眉を逆立てているから、二度とその着物で外出するなど釘をさされたのである。

諸事万端、身分階級が心理的強制をもたらし、社宅は少数権力のエゴと論理で牛耳られる閉鎖的な女社会だ。こだわるなど言っても無理な注文で、妻は、磁長と私の仲ばかり気にして身を採んでいたのである。

電話での用件を話すと、妻はみるみる生色を取り戻し、娘と息子を起こしにかかった。

娘は小学二年生で、息子は幼稚園児だが、私が緊急出勤時は、夜間熟睡中といえど容赦なく叩き起していた。その間、私はぬるめの茶をすすりながら、迎えを待っていた。

待つほどもなく運転手が現われ、家族が玄関に整列して私を見送った。

茶を二杯飲むのも決まりなら、家族の一人一人と握手しながらウィングを交わすのも、わが家の出掛けのセレモニーである。

傍目にはナンセンスだろうが、モグラも十年になると、独自のマジナイや縁起なるものが幾つも自然

に定着していた。そして家族はそれがどんなものであれ、神妙、かつ、厳粛に守っていたのである。

子供のウィングは眼る片目にことさら力を入れすぎたり、両目をちぐはぐ瞬いたりしてぎこちないが、なんとも愛くるしい。

妻のウィングには、蜜もあれば刺もある。

公私ともに脱線しがちな亭主関白だっただけに、あけた片目に角も立てば、目をそらされたりもする。射すくめられて、子供以上にちぐはぐ、ばちばち、なんともぎこちないものになることも珍しくなかったのである。

この夜は妻も真剣、あるかなしかの素早いウィングで私を送りだした。

5

学卒の中堅技術職で立坑経験者は、私のほかにも磁業所と東部磁に三名ほどいた。

しかし、運転手に聞くと、呼ばれたのはどうやら私一人のようだった。事故もさることながら、どうして白羽の矢が立ったのか磁長の意図が見当つきかね、私は複雑な思いで、迎えのジープに乗りこんだ。

頼りなげな、松岡の顔がまた浮かんだ。

元陸軍中尉殿だが、その肩書きが信じられないような気弱なお人好しである。これで兵隊たちに号令をかけたのかと疑いたくなるほど、言葉も優しくして迫力がない。およそ現場向きではないので、とうに

出世コースからははずされていた。

彼は、私が初めて手がけた上矢田立坑（深さ552メートル、平市郊外）では主務者だった。そのときも彼は優柔不断な管理が祟って、工事半ばに更迭されていたのである。

私にとっても上矢田は、喧嘩モグラの力量や真価を試されたような問題現場だった。文字どおり体を張って掘りあげたが、それだけに、当時の思い出は鮮烈に残っていた。

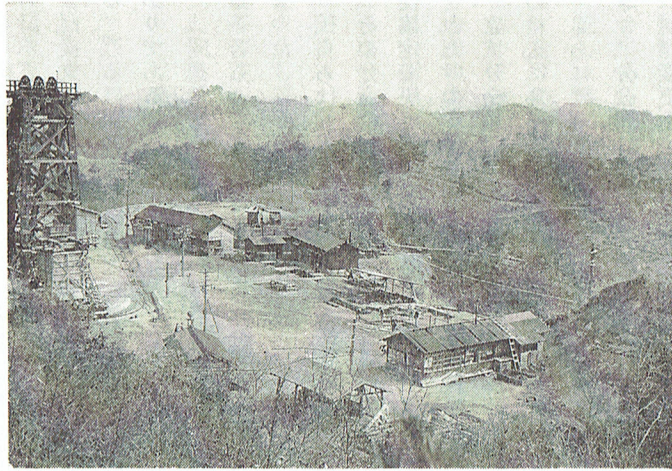
ちなみに立坑は、坑内通気と運搬系統の改善合理化を図るものとして、企業再建計画の中でも最重点的なウェイトを占めていた。

特に常磐の地下増温率は普通の倍で、深度15メートルごとに地熱が1度上昇する。一般的なパターンは30メートルごとに1度なのである。加えて温泉が湧出するから高温にして多湿、坑内労働条件としては最悪最低のハンディを背負っていた。そのため、全国でも例のないほど次々と通気立坑を開削して、坑内温度の引き下げに腐心してきたのである。

一方、稼行区域の深度化につれ、本格的な運搬立坑の開設も必須となった。すでに東部砒では、機械力を誇る住友建設に委託して、通気兼用の大型運搬立坑に着手していた。

西部砒はまだ通気専用立坑で、施工もピック掘り手積みという半原始的な、常磐独自の伝統的工法を踏襲していた。事故が発生した湯長谷立坑もそうだが、ただ管轄は、新設された開発部の立坑開削係に属する。

上矢田立坑は、昭和二十九年五月に着工、三十一年に完成している。



上矢田立坑の全景。今からみると実に見すばらしい
(昭和31年ごろ)

鉱山技術の中でも立坑は特殊で、技術的困難性よりは危険性から、モグラでさえが、

「立坑一本掘れば、三年も寿命が縮む」と、言って敬遠していた。

そのため人事はほぼ固定化され、経験豊かな実地あがり任されていた。ところがその人たちも高齢化し、上矢田立坑では主務者以下、一挙に若手学卒者に切り替えられた。

三交代係員には、内郷砒から鉱専二年先輩の高橋、砒業所技術課から早大卒の平井、そして湯本砒からは私が起用された。

私以外は学究肌のまじめな人材で、それぞれ所属部門を代表するエリート社員である。

私だけは労使双方から睨まれる問題児で、島流しも同然だ。なにしろ、与太者との喧嘩で、二度も警察署の世話になっていたのである。

砒員は坑内直接夫が三五名、運搬夫九、坑口信

直接夫は全員が内郷砒からの配転者で、その半数が整理の対象にのぼったことがある不良砒員である。残るは運搬夫や坑内大工から職種変更を強いられた者たちだ。言わば札つきの不良どもと半端者ばかりである。

人も恐れる立坑で、しかも人里離れた山奥での飯場暮らしである。私ら係員もその一室に入ったが、無茶苦茶とも言える労務や労組の配転人事に、起工式の祝い酒にも手をつけずに三人とも頭を抱えてしまった。

砒員らは、入寮早々、労組本部直属の立坑分会の結成式を仰々しくあげた。

その分会の仕事始めが、休憩時間のこまぎれ設定などの労働時間短縮の職場集会だ。彼らの賃金は労使協定で決定済みで、掘進837円、築壁650円、雑作業540円。どんなにやろうがやるまいが、それだけの本番賃金は確実に保障されているのである。

立坑分会長が、私の番方に配属された。頭も口も切れる元労組幹部だが、悪い酒癖と出勤不良で解雇の檜玉にあがったものである。

さらには、般若の刺青を背負った不良どものボスが、与太者あがりの大政、小政を従えて紛れこんできた。分会長はこれら三悪を早速抱きこんで、のっけから露骨なサボタージュを仕掛けてきた。

職種変更という企業合理化のしわ寄せを、非力ながら克服しようとする健気な者がいない訳ではな

い。だがそんな一握りの良心派もすぐ三悪らの勢いに呑まれ、ずるずると怠業ベースに乗せられていったのである。

彼らは時間になっても、休憩所でおだをあげていて、催促しないと入坑しない。やっと腰をあげても、それからの動作が実に嫌らしい。国会の牛歩戦術もどきに、目と鼻の先の坑口までをのそりのそりと歩いていく。なんとも虫酸が走る投げやりな行列なのである。いつも殿の分会長は、私をじらして楽しむかのような加虐的な嘲笑いさえ浮かべていた。

私の番方は最悪だったが、高橋や平井の方も大同小異だ。お座なりな労務対策と現場職制には陽も当たらない労使協調主義に、二人とも幻滅していたのである。

係長は、因業オヤジの名も高い砒務係長が兼務だ。実地あがりの測量屋で、現場の労務管理の困難さを少しも解さない。線を引きさえすれば、そのとおりに人間が走ると思っている。そして終日、苦虫噛みつぶすか、主務者の松岡をいじりにいじっていた。彼がよい顔見せる相手は、砒員だけである。

松岡は係長ばかりか砒員らの顔色までうかがい、人一倍の長身を哀れなくらい猫背にしてうろろろしていた。やくざな砒員らはますます増長するばかりだ。

そうなれば、もう止むを得ない。私はあえて尖兵的角色を買って出て、仕事はおろか喧嘩まで何もかも一人で背負い込んだ。その延長は飯場暮らしにまで及んで、寮監の労務係が、

「そもこまめに付き合うこともあんめえ」

と呆れるほど、顔や体に生傷が絶えなかった。

高橋や平井は、破員らの嫌がらせや悪どい干渉にいたたまれず、早々と平郊外の発電所社宅に逃げて自転車通勤だ。独り私だけが飯場に残り、口も柄も昔の悪餓鬼に戻って、連日不良どもと張り合っていたのである。

ついには衆人環視の中、不良のボスと立会人つきの決闘におよんだ。いつもいつも多勢に無勢では、いくらなんでも体が持たない。拙速に結着をつけようと私が仕掛けたもので、まんまと相手に乗っかってたのである。

立会人は夜番の労務係員で、彼も含め見物人はすべて敵側だ。私は立坑槽を見下ろす断崖上に相手を誘い、いきなり寝技に持ちこんだ。この捨て身の戦法もまんまと功を奏し、私が彼の首を絞めあげたところで、立会人がタオルを投げてきた。呆気ない幕切れだった。

この夜を境に三悪は私になつき、一転して私を甲斐甲斐しくガードした。それにつれてほかの不良どもも寄ってきて、何処に行くにも何をするにもぞろぞろとついてくる。変わり身の早さも、この人種の身上なのだろう。たちまち私の番方は、立坑現場でも飯場でも主導権を物にしまったのである。結束の固さは労務も労組も形無しで、ついには分会長の首もすげ替えられてしまった。

ところが、不意に松岡が「頼むから、退寮して通勤してくれ」と、言いだしてきた。哀願にも近い要請に疑念を抱き、私は、「それは労務の指し金ですか、労組ですか？」

と、探りを入れた。だが松岡は「まあ、そんな所だっぺかね」と口を濁し、目をしょぼしょぼさせるだけでなんとも煮え切らない。

癒着とも言える現場職制と労組員の仲は、労務も労組も目障りらしい。

松岡の窮状を見かねて、汚れ役を買って出た部分かなりある。その先輩を困らせる訳にもいかず、私は素直に飯場を出た。

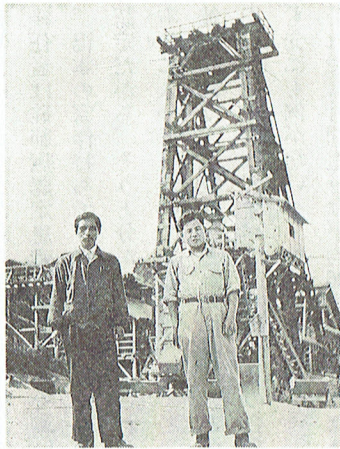
二番方あがりの深夜、数人の主だった部下たちが私の荷物を担ぎ、幾つも山越えして私を見送っていった。玄関で三悪が、いきなり、

「姐さんですか、お世話になっています」と、仁義を切った。

妻がびっくりして、立ちすくんでいた。

湯本の社宅から立坑までは、内郷と平の両市を大回りして二時間もかかる。仕事以上にきつく、特に雨や嵐の夜道はしんどいの一語に尽きる。意地で耐え意地で貫ぬく屈辱の自転車通勤となった。

その後、係長は松岡を放逐、後任に彼の腹臣で実地あがりの測量屋を据えた。技術施工は素人で、おまけにズボラときている。木に竹を接ぐような人事



上矢田立坑前で筆者(右)

の私物化に、またまた私ら係員は頭を抱えこんでしまった。

後任者は硅肺病認定患者第一号とうそぶいて、ろくに立坑もしなければ半日と立坑にいたためしがない。湯本の家作持ちで、毎日その見回りに余念がないのである。硅肺病は誤認だそうだが、「政府機関の認定だから、そうと分かっても訂正されることはない」とぬかし、一生、障害年金が転げこんでくると有封^{うけ}に入っていたのである。

彼の顔には、「狡滑」とか「自墮落」とか破廉恥な文字が、幾つも浮かんでいた。止むなく工事は、すべて三交代係員の合議と協力で進められた。何から何まで係員任せの立坑は、後にも先にも例がない。

それでも月間進行は平均26メートルとなり、それまでの常磐記録を更新した。

兵隊は半端者ばかり、学卒の若僧らに何が出来るか和白眼視された冒険人事だったが、結果的には、常磐の立坑技術と人事の活性化に展望を開く有力な試金石となった。

私は、部下の全員が、配置転換という再生のハードルを見事にクリアしたと上申した。

札つきの不良どもは皮剝くと、やる気満々の気っ風の良い人間だった。分会長も組合の肩書きがとれると、昔気質の先山の顔を取り戻して、私にもチームにも見違えるようによく融けこんでいたのである。

だが、竣工式は素っ気なくて、労組本部の役員らは浮かない顔をしていた。あるいはこの立坑で、手に余る厄介者の自然淘汰をひそかに謀ったのではなからうか……。

私は、部下たちと白鳥温泉の喜楽屋に繰りだして、盛大に飲み直した。喜楽屋の若旦那は、磐城中学(旧制)の同級生である。

宴会後、二台のハイヤーに分乗して町に繰りだした。だが、気がついたら、車は警官の先導で湯本警察署に横づけされていた。

なんと、ステップまで人が溢れて走っていた。

ちなみに佐々木は、上矢田立坑で実技習得後に立坑主務者になったもので、湯長谷は二本めの立坑に当たると。

Ⅱ 恐怖の釣り天井

1

飛んだ麻雀になった。

いつもなら自然と身が引き締まる緊急出動だが、後ろめたさに気が散ってしまい、迎いの車に乗っても私の腰は据わらなかった。

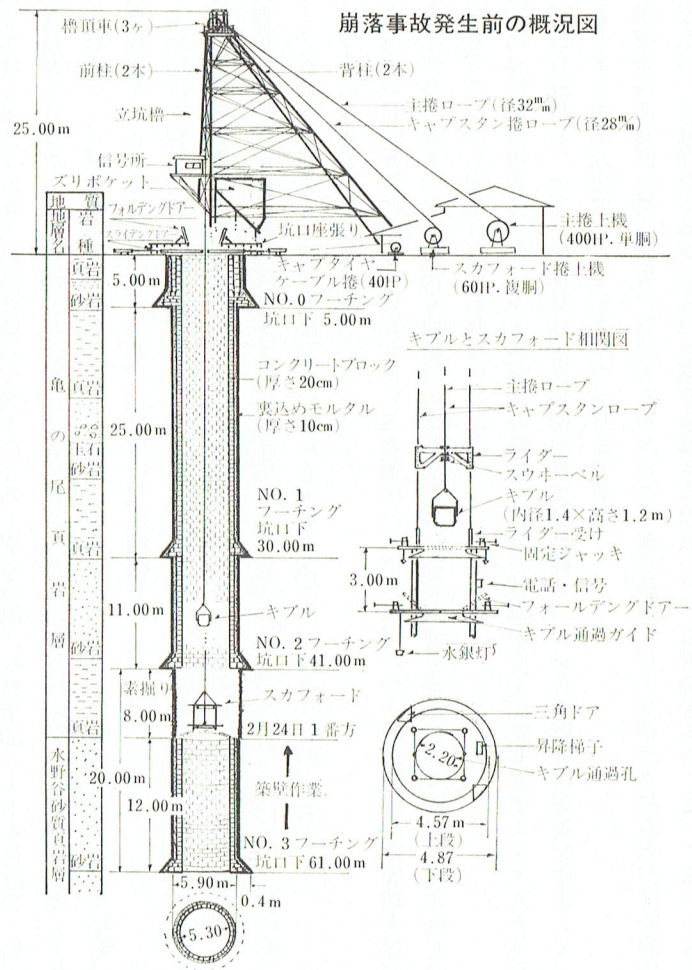
車は寝静まった湯本の表通りを突っきり、旧浜街道を一路南下した。

東北戊辰戦争で、官軍が勿来の関寄りの常州平潟港に上陸後、怒涛のごとく北上した街道である。官軍は泉城と湯長谷城を一気に抜いて、猛然と平城に襲いかかっている。

その湯長谷と泉田集落を経て、浜街道は泉駅の先で六号国道に合流していた。

湯長谷までは常磐線をすぐ左に見て走っているが、その先は起伏の多い曲がりくねった山道に入ってしまう。反対側の六号国道と比べると、忘れられてしまったような寂しい裏街道で、まだ舗装もされていなかった。湯長谷立坑は、浜街道から西に300メートルほど入った低地にあった。そのすぐ東隣は、夜目にもすぐそれと分かる寺と墓地……。

(縁起でもねえ所に、坑口を付けたもんだ)



早くも、嫌な予感がしてきた。寺側の崖際に、高さ25メートルの鉄製槽が、寒空に筋張ってそびえていた。踏ん張った槽の四肢には投光器が取り付けられ、その照明の中で大勢の人間が右往左往していた。そのほかだだっ広い敷地には幾つもの火が焚かれ、思い思いに夜空を焦がしている。そして敷地の入口広場は、何台もの乗用車で埋まっていた。想像していた以上の物々しさに、私の体も筋張った。ましてや先刻まで、麻雀にうつつを抜かしていたのである。関係がないとは言え、気が引けて自然と身が詰まる。碓長は、空気が圧縮機室の休み場で、一人つくねんとして私を待っていた。私が挨拶するより早く、彼が腰をあげ、「おう、来てくれたか。ご苦労さん」と、おうように声をかけた。

並々ならぬ自信の表れでもあろう。いつも彼は悠揚として追らぬ態度で部下を呑む。毛並みの良さに加えて強力な閉閥、腹に一物あっても彼になびかぬ者はいない。

周囲をやきもきさせるほど独身時代が長く、知性的な風貌でプレイボーイの名もほしいままにしたが、最後はあっさり碓業所長の手に落ちて娘婿におさまり、みんなをがっかりさせた。

「前代末聞の大崩落事故だ。碓員が一人、埋まってる。崩落はまだ続いてて、危くて坑内にも入れねえ。手につけられねえんだ」

いつになく苦り切った表情で、碓長はすぐそそくさと事故の概況を説明しだした。

事故発生は二番方と三番方の交代時の午後十時ごろ。崩落現場は坑口下50メートル付近で、崩落ズリの衝撃と重みでスカフォード（吊り足場）が大きく傾き、水汲み作業中の破員が坑底に転落して生き埋めになったという。他の破員や係員らは、崩落直前、交代のため昇坑して危うく命拾いしている。

坑口も揺るがすような大轟音とともに、坑壁は一気に崩落したらしい。

佐々木が危険を冒して入坑したが、崩落は横方向にも上方にも拡大する一方で、彼も命からがら退散したそうだ。その崩落は、いまも続いており、二次災害を恐れて入坑を差し止めているという。

「そんなに、ヤマが悪かったんですか」

「ン……そうとしか言えんな……。小崩落は朝から何度もあったんだそうだが……」

私は、すぐには信じられなかった。

そもそも立坑は、比較的岩盤が安定している地層中に計画され、かつその周辺の一定範囲を保安炭柱として残すため、施工中も完成後も地層はあまり乱されない。断面も地圧に強い円形で、よほどのことがない限り、こんな大崩落は考えられないのである。

ちなみに立坑開削方式は、20メートル前後の階梯で掘進と築壁を交互に繰り返すロングステップシンキング工法を採用している。階梯長は主に地山の良否で伸縮し、ヤマが悪ければ掘進を中止して、早期にコンクリート覆工（築壁）してしまうのが常道である。

また常磐の施業鉱区一帯は砂岩と頁岩の互層からなる第三紀層で、ドリル改良型の大型破砕機で破岩が容易なため、坑壁保全上からもピック掘り手積みに固執している訳でもある。従って破長が言ったよ

うに前代未聞、立坑の崩落事故は工法上希有に属する。

局部的な崩落が皆無な訳ではない。それはままたち、小崩落が大崩落に発展する危険性は立坑ほど計り知れないものはない。

私は上矢田立坑で、築壁作業中、あわや大惨事となりかねない崩落を経験している。

仮金棒をはずした途端、危いと見ていた周壁の半分ほどが崩壊して、たちまちスカフォードが傾いてしまったのである。

分会長をはじめ不良どもが、我先にとキブルに飛び乗って逃げようとした。私は大声で怒鳴りつけ、スカフォード上の崩落ズリを死に物狂いで坑底に掻き落とした。怒声と必死の形相に呑まれたのか、破員らが恐る恐るキブルから放れて私にならいだした。

スカフォードは、大きく揺れて復元した。

私はすかさず信号を送り、スカフォードを崩落部の上限位置まで避退した。そしてすぐ崩落部の中に身を挺して、素早く応急的な山留めをしたのである。

すんでの所だった。キブルで逃げても、スカフォードのロープが切れたら助かる見込みがなかった。またヤマの崩落は何処まで拡大するか知れなかったのである。

立坑の崩落、そして崩落拡大のメカニズムは体験的に把握できたが、崩落の前兆、ないし初期の段階で佐々木らの打つ手はなかったのかと、私は理解に苦しんでいた。

破長は、先を急いでいた。

「こうなりや、立坑を埋め戻して崩落を食いとめるしかねえ。対策本部も、とりあえず、坑口から土砂を投げ込む方針を決めた。それしか、立坑を生かす法はねえって訳だよ」

(人命より、立坑の方が大事ってことか?)

磁長の口振りからは、立坑そのものが危いという危機感しか伝わってこなかった。

「そんで、西部磁には立坑経験者がいねえんで、磁業所長が君を対策本部に寄越せと言っている。大変な復旧工事になりそうだが、東部磁を代表して応援してやってくれんか」

命令口調ではないが、眼鏡越しのきつい目が、もう決定済みだと言っていた。

否も応もない。そのまま私は、磁長にしょっぴかれるようにして事務所に向かった。ゆったりとした彼の大きな背中が、俺の出番はこれまで、さっぱりしたと言っていた。

立坑事務所には、労使のお歴々がわんさと詰めかけていた。係長席で磁業所長が、副所長や保安部長と額を寄せて協議していた。そのほかの机と椅子の大半を、組合長以下の労組幹部がふんぞり返って占領していた。

そんな片隅で、松岡と佐々木が放心の体で突っ立っていた。私と目が合うと、ほっとしたように二人の口元がゆるんで目が輝いた。

「所長、野木を連れてまいりました」

直立不動の姿勢で、磁長が男に報告した。

所長は磁専の大先輩だが、技術屋というよりは策士という評判が高い。

所長は猪首をあげただけで、「おう来たか、頼むぞ」と言ったが、さほど当てにしている風でもない。

磁長が私を売り込んだのが言わずと知れたが、もうそんなことはどうでもよかった。

私は振り向きざま佐々木に目配せして、さっと事務所を飛びだした。

得たりや応と、佐々木も飛びだしてきた。余計な言葉は必要でなかった。

「いっべん、現場をのぞきてえんだが……」

「ン、俺もそう思った。行くべ行くべ」

渡りに舟と、佐々木が乗ってきた。

すると、小太りの黒い影が、かがり火の群れを放れてのっそりと寄ってきた。

「入坑でもすんのか？ なら、手配すっぞ」

聞き覚えのある野太い声に、私は驚いた。

「オッ、剛三さんか……」

佐藤剛三は陸士五十八期の歩兵少尉、私は六十期の陸軍航空士官候補生で特攻隊要員。戦後、彼は私と同じに道草を食って入社がおくれ、あたら一介の機電係員に甘んじていた。洞察力が鋭い才気煥発の実力派だが、彼がこの立坑所属だとはついぞ知らなかった。

陸士の先輩は陸大出の労務屋も含めて数人いたが、私ら第六十期生は戦争末期の消耗品だ。比較的余裕のある時期に、ひたすら立身栄達を夢見て進んだ先輩期とは、入校の動機も鍛えられ方も全くちが

う。物質や食糧、そして時間さえ底をついた窮乏の中で、猛烈な速成教育を受けた。半ば栄養失調の体をひしと寄せ合い、加虐的な猛しごきに耐えながら日夜死生観を摸索していたのである。

国や時代とはもはや心中するしかない。ならばいさぎよく完全燃焼しようかと、同期生の大半が開き直っていた。動機的にはより純粹で、死生観にしても極めて人間臭い。それなのに先輩から、六十期生は粗製乱造とことごとくに貶された。だから同期生への慕情は、いまも綿々としてあるが、私の中で先輩後輩という絆の意識は薄かった。

ただ佐藤だけは、その不遇が身につまされもして、ないがしろにできない。本人は露ほども心のひだを気取られまいと人前で豪快に振る舞っているが、最近、近所迷惑の尺八に凝りだしたという。なおさら彼の屈折した思いが伝わってきて、私も彼にだけはさりげなく後輩としての礼をとっていたのである。

佐藤の出現は、鬼に金棒だ。たちまち意気投合して、冒険的な入坑段取りが決まった。

しかし、私らの入坑は無暴だと水を差す声が圧倒的で、しばらくはひと揉めした。

頭数も口出しも多いが、立坑はみんな食わず嫌いのおっかなびっくり。いくら説明しても、止せ、と言っつきかないのである。

嫌気がさしたころ、思いがけなく強力な助け船がでた。私と悪意の小林保安課長が、

「この二人がコンビなら、大事あるまい」

と、太鼓判を押してくれたのである。

彼は十六歳で坑内大工になったという苦勞人で、支保工や防災工事の生き字引と言われるベテランで

ある。実地あがりですべての保安統轄者にのほりつめた異色の存在で、温厚な人柄とキャリアには破業所長でさえ一目置いている。私は半年ほど彼の下で勉強したが、ヤマ一筋に生きるひたむきな姿勢には文句なく脱帽した。実地あがりでありがちな「経験」をひけらかすということがなく、「経験」の重みがいながらにしてどっしりと根づいているような御仁なのである。

彼も私に何を感ずるのか、会えばいつも親しげに笑ってくる。何をしでかしても、「お前さんの腹は読んでいるよ」というような微笑いだった。

小林課長は佐々木と私に、「のぞくだけ。深入りすんなよ」と、くどいほど念を押したうえで、破業所長にとりなしてくれた。

だが彼は、私をそっと物陰に誘い、

「佐々木は気が立っている、そのつもりでな」

と、釘をさすのを忘れてはいなかった。

2

立坑は常時落下の危険がつきまとい、人も物もバランスを失えば破滅的結果を招く。

坑底は逃げ場もない奈落の底で、径32ミリのロープ一本が文字どおり命の綱だった。

人は内径1・4メートル高さ1・2メートルのキブル（鉄製運搬容器）に搭乘して上昇坑するが、そのキブルは2本のスカフォールドの吊りロープ（径28ミリ）をガイドとするライダーで安定が保たれてい

る。もしライダーがないと、キブルはロープのより戻しで猛回転し、安定を保てないばかりか搭乗者は目を回して失神してしまう。危急を知らせるにも途中の空間は真っ暗闇で、信号も電話もないのだ。

ところがこの夜は、崩落ズリの衝撃と重みで、吊りロープの一本がスカフォードから離脱して、ライダーが使用不能となった。

止むなく私らは、細長い鉄筋棒をライダー代わりに用意した。それで片方の吊りロープをこすりながら下降し、辛うじてキブルの回転を防ごうという訳である。また坑口信号所との合図用に手ハンマーを持参した。それでキブルの縁を叩いて出所進退を知らせる。

いずれにせよ泥縄式の苦肉の策で、内心は全く冷や冷やものの入坑なのである。

私は佐々木に鉄筋棒を預け、自らは手ハンマーを持った。一般に重大事故発生時は、責任者は冷静な判断に欠けて二次災害を誘発しかねないので、即座に事故收拾の輪から除外される。この場合は他に経験者がいないため佐々木の随行が黙任されたが、出所進退の主導権だけは彼に任せられなかった。

私たちが坑口ドアの上に置かれたキブルに乗り込むと、機械運転の手配を終えた佐藤剛三が、どっかと坑口座張りの上に腰を据えた。

坑口ドアは観音開きの木製フォールディングドアと、水平開きの鉄製スライディングドアの二重構造になっていた。いずれも圧気動で槽中段の信号所で、信号手が下の安全性を確認しながら開閉操作をする。また、信号手は坑内からの信号を捲き場に中継する。捲き手はその信号を受け、ロープ巻き取りドラムの回転で示される深度計を確認しながら、慎重に安全運転する訳である。

私は、まずキブルを信号所位置まで捲き上げさせ、信号手と合図の確認をした。

「じゃあ、いいな。緊急時はこのハンマーでキブルを乱打するから、そんなときは委細かまわず全速で捲き上げる。分かったな……？」

信号手が、こっくりとうなずいた。

「よしッ、下がるぞ。坑口ドアを開けろ!!」

ガタ、ガタン……。まずフォールディングドアが夜気を震わせてぼっかりあいた。

ドド、ドスン……。スライディングドアの鈍重な震動音で、立坑槽が貧乏揺すりした。

するとその直後、突如として、肝がつぶれるような大崩壊音が坑内から湧きあがった。

バリバリッ、バリ、バリッ、ドドーン……。

鉄骨槽が、ぶるぶると震えあがった。

まわりの風さえ、わなわなとおののいた。

キブルが、ゆさゆさと揺れた。

私は、キブルの縁にしがみついた。

坑口座張りに集まっていた野次馬は、のけぞりながらわらわらと周囲に飛び散った。

一瞬だったが、それにしても物凄い。物凄い音だ、煽りだ、震動だ。坑口一帯が、立坑槽ごと家鳴り

震動したのである。

余震も、しばらく続いた。

バシヤバシヤ、バシヤッ、バリバリッ。

大崩壊のあとに裏落ちする大小のズリが、坑底にたまった水面を叩く音である。それがなんとも無気味だ。

恐らく、坑口ドア開放の衝撃が、鳴り音ひそめていたヤマを一気に刺激したのだろう。なおヤマは一触即発の危険な状態にあるのかと思うと、さすがの私も青くなった。

「危えぞう。止めたらいいでねえかあ」
野次馬たちが、口々に怒鳴っていた。

私がどうすると佐々木に聞くと、彼は、「どうってこたあねえよ。このぐれえ……」

と、事もなげに吐き捨てた。やけっぱちともとれる口振りが気になったが、坑口座張りの上では佐藤剛三が、一人泰然自若として私たちを見あげていた。

(さすが、つわもの！ よし、行くか)

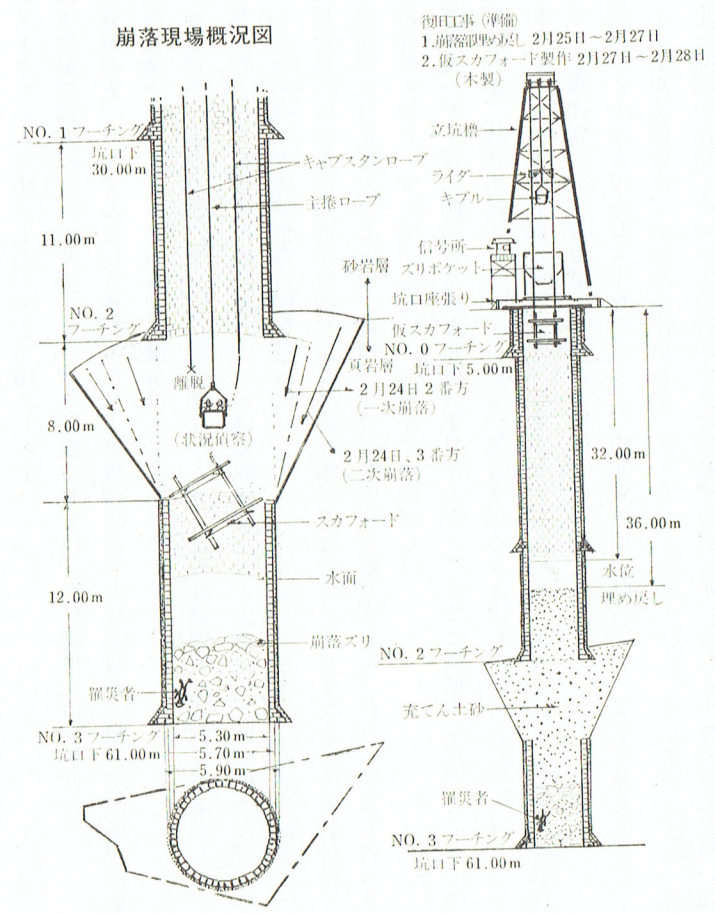
愚図愚図していたら、事務所から中止命令が届くのが目に見えていた。佐藤の姿に励まされるようにして、私は心を決めた。

「よしッ、下げる。ゆっくりだぞッ」

信号手が捲き場に信号を送ると力強いロープの弾力が足許に伝わり、キブルは武者震いのようなひと揺れをして始動した。そのあとはそろりそろり、キブルは頼りなく揺れながら静かに坑口を通過した。

座張りの上で、佐藤が大きくなすいていた。彼は私が送る合図の中継役である。

崩落現場概況図



佐々木が、周壁のコンクリートブロック段数を目安に、私に深度位置を告げた。

徐行運転だと、ぐんぐんという小刻みなロープの弾力がじかに足許から響いてくる。それが五年振りの立坑の感触を蘇らせ、下がるほどに勘も冴えて度胸がついてきた。

しかし、25メートル付近で、またもや闇をつんざくような崩壊音が坑内を揺るがした。

空気がびりびりと震えたかと思うと、一陣の風がさあっと上に吹き抜けていった。

ガンと一発、私は停止の合図を送った。

両足を踏んぱりながら両手を突きだし、佐々木が必死でガイドロープをこすり続けた。

木の葉のように揺れだしたキブルは、辛うじて安定を取り戻した。ただ、裏落ちのズリが水面を叩く音は散発的に続き、すぐ真下だけに無気味さが倍増した。

薄気味悪いが、第二階梯の基底部（坑口下41メートル）までは築壁済みだ。そこまでは行けると私は踏んでいたが、佐々木はスカフォードまで一気に下がろうとけしかけてきた。

しかし、ハンマーの合図の音さえやまを刺激しかねないのである。はやる佐々木を私は黙殺、キャップランプと携帯電灯で下方を確かめながら緩降下を再開した。

深度30メートルで停止して下をのぞくと、約30度に傾いたスカフォードが見えてきた。

40メートル位置でも、いったん停止した。

停止と発進のたび、ハンマーの音がやまを挑発する訳だが、それもやまの反応を窺い知る唯一の手段

たり得る。さあどうだと聞き直って、私は力任せにハンマーを打ち振った。

ウンともスンとも言わぬやまに気を許し、また降下を始めた途端、第二階梯底部の一部がもげ落ちているのが目に飛びこんできた。

慌てて合図を送り、急停止した。

異常な光景に、私は息を呑んだ。

なんと、第二階梯の真下は、スカフォード位置までがらんどろになっていたではないか。崩落は事故発生箇所から、およそ10メートルも上方まで広がっていたのである。

まるで洞窟。灯りも奥まで届かない。

「こりゃ、ひでえなあ……」

佐々木に言うともなく呟いたが、彼は洞窟の闇に目を奪われたまま茫然自失の体だ。

すでに後破れは静まったが、物言わぬ洞窟の闇がなんともおぞましい。静かすぎるのである。なにやらやまが、わざと息を殺して私らの隙をうかがっているようでもある。

（これは臭い、何かある。長居は無用……!?!）

モグラの習性的な勘が先を急かせた。

私は、スカフォードの真上まで一気にキブルを進めた。その位置で瞬時に全体像を把握後、すぐ退去した方が無難と判断したのである。

キブルはすっぽり、魔の洞窟に呑まれた。

見あげると、第二階梯の築壁本体はほぼ足許を抉り取られ、完全に宙に浮いていた。

洞窟の水平的な広がり、立坑の規定断面のおよそ三倍近くもあった。

崩落したのは砂岩層の下の頁岩層で、層の境目からそっくりきれいに剝離していた。

砂岩層の底面はしっとり青味がかって鈍く光り、湧水が糸を引いて垂れ落ちていた。

欠落した基底部の反対側に目を移して、ぎょっとした。なんとその壁体の一部に、新たな一筋の亀裂

が走っているではないか。

(これは危いッ。また、破れる！)

キブルごと巻き込まれるのは必定だ。

私はもうこれまでと叫ぶなり、全速運転の捲上げ信号を送った。それも夢我夢中で、力任せにキブルの縁を乱打した。ヤマを刺激しようがしまいが、それはもう念頭になかった。

(早くしろ、早く捲け、キブルよ動け!!)

一刻、一瞬がやけにもどかさかった。

折りが通じたのか、ぐ、ぐうんという強いロープの弾力が、足許から頭のとっぺんに突きあげてきた。キブルはのっけからぐんぐん弾みをつけ、すぐさま全速運転に入った。

第二階梯をすり抜けるや、ヤマは、またまた大音響をあげて崩壊した。間一髪だった。

3

私らが目撃した崩壊規模の大きさと異常さは、上層部の想像をはるかに超えていた。

あらためて復旧工事の練り直しが朝方まで続けられ、対策本部の編成が決まった。

作業は立坑現有勢力の三交代制で進められるが、作業内容から西部磁の支線(支保工)係員二名と機電係員一名ずつが、三交代の各番方に入って応援することとなった。

ただし対策本部の指揮班は昼夜二交代制で、私は小林保安課長と西部磁副長を正副キャップとする夜番に組み込まれた。ほかに西部磁機電係長と機電主務者の二名がつく。

昼番の顔触れは豪勢で、開発部や機電部次長など、磁業所技術スタッフの大物が名を連ねていた。これに松岡や佐々木、そして佐藤ら立坑メンバーがそっくり組み込まれた。

夜番の指揮班は質量とも明らかに劣勢で、また、工事の実戦的負荷が私に集中するのが目に見えていた。

なしろ副キャップの高木などは、早速、

「俺もみんなも、立坑は素人。万事、お前さんに任すから、うまく仕切ってくれよな」

と、私に下駄を預けてきたのである。

それだけでなく、12時間稼働二交代制の坑内勤務は全く変則、かつ過酷すぎる。昼番ならまだしも、完全復旧まで休日なしのぶっ通し夜番なのである。

早くも私は、げんなりしてきた。

救出作業は、坑口より土砂を投入して崩落区間を完全充填、その後土砂を取り除きながら小刻みに坑底に到達する。その過程で崩落した空洞部は、逆巻き工法でコンクリートブロックを充填して完全に閉め切る、という大筋の方針が決定した。

名目は救出対策本部としながらも、もはや誰も罹災者の救出なんて思ってもいない。あくまで立坑を生かす、という復旧工事にもつばらウェートを置いて、会社側は遺体収容を副次的に考えていたのである。

工事方針の決定に際し礫業所長は、住友建設の立坑権威者で東部礫鹿島第二立坑（予定深度763メートル）を請負させた大物所長を呼んで、その献策を入れている。

土砂投入には、労組側が難色を示した。

住友所長の現場招請は、すなわち労組を沈黙させるための工作でもあり、その説得効果を意図的に導入したものと私は読んだ。

4

明け方、やっと解放された私はそのまま湯本六坑の人車場に直行、臨時入坑して自分の担当現場に赴いた。

応援が長期化するのには明らかである。留守の間は代番者がつくだろうが、ヤマは生き物で、長く馴染んだ主でないとなかなか寵し切れないところがある。その動静や難点など、ヤマの癖を書き残しておく

のが、当事者の義務とも作法とも考えたからである。

私の現場は、「北光坑水抜斜坑」。

その名のとおり、地下水位低下の水抜き試錐基地を持つ最深部の現場である。

長壁式採炭を目指す斜坑と沿層坑道の掘進のほかに、隣接ブロックに通ずる電車坑の岩石坑道掘進も担当していた。

係員六、発破係員四、書記（事務）三、礫員二六〇名という大世帯である。担当範囲は複雑多岐にわたり、全区域をただ巡回するだけでも優に三時間を越えた。そのため工区も手勢も二分割したが、私の負担は少しも軽くない。

いまでこそ順調だが、水平坑道から斜坑掘進に移行した当初は、焦熱地獄のような問題現場だった。何処を掘っても摂氏65度の熱湯が多量に噴出したのである。

切羽では、背中から放水を浴びて作業を続けた。それでも5分と持たず、交代で水風呂に飛び込んだ。炭車で送り込まれる大氷塊を小割りにして、塩をなめながら齧じる。そのほか冷凍機つきの最新型の局部扇風機も、私の現場では集中的に使用していた。そうでもないとなちまあかまってしまう。

「あかまり」とは、高温多湿の常磐炭礫で多発した特有の熱中症である。37度以上は高温箇所扱いで特別手当がつくが、それ以下でも湿度が高くて風通しが悪い排気坑道では油断できない。温度や通気状態のほかに、体調の個人差が微妙にからむのである。

また、長時間やせ我慢していると、不意にこれが襲ってくる。ひどいときは手足や腹部の筋がケイレ

ンして、ついには幾つも瘤^{コブ}ができて昏倒する。最悪時は死に至る。年に四、五人の犠牲者が出るのも珍しくなかった。

そのため高温現場には、固形塩や梅干しが常備されるほか、坑口検身所ではビタミン剤が入坑者全員に配られていた。東北大教授がこのあかまりを研究して学位を得ている。人呼んで「あかまり博士」。それほど炭^や磁^までは警戒も恐れもしたのである。

すでに大規模な水位低下の計画実施や通気系統の改善によって、問題的な高温現場は激減していた。禪一本という切羽は稀^{まれ}で、大勢は半袖シャツに半ズボン、そして脚絆^{まきはん}という軽装に移行している。独り私の現場だけが昔ながらの常磐の悪条件を、一身に背負い込んでいたのである。

そんな現場の就業管理ほど難しいものはない。案の定、私が前任者から引き継いだときは、条件最悪という被害者意識が労使双方にはびこって投げやりで、なんとも放恣^{ほうし}な空気が職場全体を支配していた。

管理する現場職制側は無理はさせられないと及び腰で、何よりも労組との悶着はご免だという逃げの計算がありであった。碓員らはそれを見ずかしてサボリ放題、本番夫などの実働平均時間は四時間以下にも落ちこんでいたのである。

私は特大の看板に主務者方針を認め^{したた}、坑内現場詰所の碓員番割所に掲げた。

誠意 協調 元気

北光坑水抜斜坑はかくありたいと思う。だから、それでれ、それで何とか時間までという愚図とぐうたら連中との付き合いは真っ平ご免を蒙る。他人より余計に楽をし、それで他人よりも余計に錢^{ぜに}を貰うなんて乞食根性も、真っ平ご免だ。男は、「頭」と「腕」と「気っ風」！ その男を競って、最善を尽くせ!! 遠慮は、互いに無用なるべし。以上

職場規律もたるんだ空気に喝を入れたのだが、労働攻勢たけなわのとき、この方針揭示は労組に喧嘩を売るも同じだった。

果たせるかな、職場委員長が血相変えて詰所に怒鳴りこんできた。

「いってえ、あれは何の真似^{まね}なんだ。あんたは我々労働者や組合をなめてんのかッ」

彼は支線や雑工など本番夫の先山で、書記に言わせれば労組専従者になりたがり屋の事件屋^{トランクルーカー}だという。だが人望^{ひとぞろ}がなくて、一向にうだつがあがらないらしい。

私は、「ご覧の通りだ。ろくに字も読めねえのか」と、わざと素っどぼけた。

「なんだと? こんなひでえ条件も、言ってみればあんたら職制の怠慢^{まげ}だっぺ。それでも我々は命^{いのち}がけで協力してんだ。いってえ、あなたの現状認識はどうなってるんだ?」

彼は、かんかんだ。

「あれは労働強化の一つの芽と、我々は認識せざるを得ない。そんなものを見すごしていたら、栄えある常磐の、労働史の歯車を逆転することにもなりかねねえ……」

黙って聞いていたら、言うに事欠いて受け売りの労使協調主義まで持ちだしてきた。

そのあげく、「引っこめなきや、組合あげて闘うがいいのか」と、凄んだのである。

そんな脅しは計算ずみ、むしろ思う壺だ。

ころやよしと、満を持していた私は、

「なんだと、命がけだど？ ほざくなッ。水風呂の中で、金玉比べて油売ってんのが命がけなんか。労働者の血と汗だど？ ざけんでねえ、労働者労働者って安売りすんなッ」

と、一気に怒りをぶちまけた。

「お前らときたらお犬様。上げ膳据え膳で、そんなも足らぬとぬかしやがる。なんだと、労使協調主義だど？ 馬鹿も休み休み言え。そんなもの、お前らの隠れみのでねえか。俺はな、そんな子供だましの隠れんぼに付き合ってる暇なんか、これっぽちもねえわい」

彼らは悪条件を逆手にとって、労賃単価引きあげのあこぎな条件点数稼ぎに目がない。いまや、だからでれでれの一挙手一投足まで、金に換算されないものはないのである。

私も、捲し立てたら止まらなかつた。

「闘うだと、おう良かっべ！ 組合本部でも労務係でも、何処なりとさっさと持ってけ。こっちも望むところだ。相手になつてやる」

よれよれの土気色の手拭いを首に巻き、禪一本で長椅子にあぐらをかいた私は、もうすっかり地金をさらけだしていた。

職場委員長は、そんな私の逆襲を思ってもみなかつたのか、哀れなほど、鳩が豆鉄砲食ったようにきよときよと、そわそわしだした。

私は、追い打ちをかけるように、

「俺の方針の何処が悪いのか問題なのか。字が書けるなら一言一句、間違えずに書きうつして持ってけ。もう、何も言うことあねえ」

と、叩きつけた。

初めの勢いも何処にやら、委員長は青菜に塩、すごすごと退散していった。

だが、組合支部には駆けこんだらしい。

書記の報告では、「相手が悪い」と、支部長らに軽くないなされたそうである。

私は手ぐすね引いていたのだが、労組もさるもの、あっさりかわされてしまった。

その後、「だからだ、でれでれ、それで……」といううたい文句が、現場で急にはやりだした。そしてそれが符丁とも掛け声ともなつて、実に活気溢れる明るい職場になり、職場規律も回復したのである。

水抜き斜坑を担当して、まる二年になる。

その坑内図は単なる直線の交錯にすぎないが、私の頭の中では、線の一つ一つが実物大に拡大されて生き物のようにのたうつてもいる。苦勞しただけに、また足を棒にして歩き回ってきただけに、場所ご

とのヤマの輝も坑道の起伏もそらんじているのである。

特に排気坑道は熱気がむんむんして、排気に含む硫黄分が痛いほど目にしみる。最大の難所は、45度の急坂が200メートルも続く総排気で、目もあいていられないほどの勢いで熱風が駆け上がってくる。断面は屈まなければ進めないほどせま苦しくて、足許はつるつると滑る。ロープを頼りに、そこそ必死の思いで通り抜ける毎日で、いままってあかまりの危険性をいっばいにはらんでいるのである。そんな排気坑道の整備や巡回時の自己防衛策を主に、私は誰とも分からぬ代番者にこまごまと申送り事項を書き残した。

5

私は、物置きからオンボロ自転車を買って張りだして、タイヤを取り替えた。上矢田立坑で通勤を強いられたとき買い求めた中古品で、しがない現場職制の恨み辛みが車体にしみついている。

今回も自転車通勤は私だけで、ほかの幹部は社有車で送り迎えた。碓員でさえ専用の通勤バスで、佐々木が流行の先端を切って125ccのバイクを颯爽と乗り回していた。そんな差別感もベダルにからみついて、上矢田以上に辛気臭い立坑通いが即日始まった。

二十五日午後四時三十分、坑口からの山砂投入が開始された。

罹災者の遺族の合意を得たの言うまでもない。遺族は会社労務と労組幹部らに付き添われ、昼すぎ

に坑口で回向を済ませている。罹災者の妻は幼な子とともに坑口座張りにひれ伏し、夫の名を呼び続けて号泣したという。

二十七日午前十一時三十分、山砂投入が完了した。山砂は泉田地内の次期立坑予定地から採取、トラック運搬台数は175、計640立方メートルの投入量となった。これにより坑口下36メートルまで充填され、水位は32メートルまで上昇した。

一方、立坑敷地の一角では、復旧工事の仮スカフォードの製作が昼夜兼行で進んだ。

本スカフォードは鉄製円盤二段床の作業足場で、掘進時は坑底の作業員を保護する掩蓋ともなつて下降していく。築壁時は、作業足場となつて坑底から上昇する。言わば坑内の動く重要基地で、照明設備や電話、さらにはポンプなど排水設備も搭載している。

しかし、急造の仮スカフォードは木製だ。

常磐製作所をはじめ、全山の機械電気や工作関係の技術陣と職工たちが召集され、設計や製作、そして組立てが同時併行的に進行した。

立坑構内は、人も物も溢れて戦争のような騒ぎである。それでもより早く、より安全にというコンセプトは見事に統括されている。そのあたり、多種多様な大事故を経験してきた炭砒の年輪が如実で、技術陣の集中力と器用さはさすがというほかはない。

外部の応援者が不眠不休の準備工作に追われている間、いちばんのうのうと太平楽を並べて油を売っていたのは、ほかならぬ事故当事者である立坑の碓員たちだ。

雑用を言いつけてもたらだらでれ、いつしか休憩所にしけこんでふざけ合っているそんな彼らにおもねって、係員までがストーブの前で股ぐら広げている。絶えず現れる労組幹部はもっぱら人気稼ぎで、彼らをおだててばかりいる。そのたびやりかけの仕事が放り出される。交代時間までまだ間があるのにさっさと入浴をすませ、さっぱりした顔を並べて通勤バスを待っているのである。

彼らが目の色変えて真剣になったのは、復旧工事期間中の特別手当要求の職場集会だけである。緊急事態とわめきたてて、強引に物にした。あまつさえ半数宛の交代稼働も提議して、一人当たり実働時間の半減に成功した。こんな非常の場合でも彼らは、夜も昼もない大勢の応援者を尻目に、楽で銭になる選択とその実現に汲々としていたのである。

態度も横柄おっけいなら、言葉もぞんざいだ。まるでごろつきのような彼らには、同僚の事故死も全く影がうすかった。

会社は二月に入って、新たな合理化長期計画を労組に提示したばかりである。労組が臨時大会を開き、会社提案をやっと下部討議に持ちこんだ矢先の突発事故である。破員らのがめつい要求をう、呑みにする会社の弱腰も分からない訳ではないが、私は崩落現場を目撃したときから、事故誘発の人為的なミステリアスな部分に深くこだわっていた。

労組は保安上の手落ちとして激しく会社側を糾弾したが、手落ちというよりは工程管理ミスである。特に崩落した頁岩層は、空気と湧水で風化と膨脹変化を早める問題地質だ。そのため掘進速度に応じて階梯長を切りつめ、より早期に築壁に移行すべきだった。なのに崩落した区間は、頂部で二十三日間も

素掘りのまま放置している。側壁は風化に任せ、ヤマの弛緩はかなり奥部まで進んだはずだ。

ヤマは破れるべくして破れた、と言わざるを得ない。ヤマはそも長く放ったらかしにされることに、少しも寛容ではないのである。

佐々木はきまじめだが、ぶつきら棒で愛想がない。およそ対人関係に芸がなさすぎる。少々呂律がはいまいで、特に語尾が宙に拡散して聞き取りにくい。根はいい人間だが、まわりは得てして表現未熟な人間に親切でない。彼もそれを意識してか、いつも洗面作って他人との間合いをあけているようだった。

それでも下船尾立坑では、初体験ながら月間平均38メートルという記録的な好成績をあげた。その数字に私は驚いたが、配下は最精鋭で鳴る湯本四坑チームだ。昔ながらの坑夫気質と腕を持つ破員が揃っていた。しかも、立坑で最大の障害となる湧水が皆無だった。出るべくして出た記録と私は納得したが、佐々木にすれば夢よもう一度と、過大な期待や抱負を持って湯長谷立坑にのぞんだのではないか。

ところが今度の兵隊は、柄の悪さで鳴る内郷磁の配転破員だ。冷や飯食らいというひがみ根性もしみついでいて、脅しやすかしの硬軟からめた工夫が最も必要な厄介な人種なのである。彼の洗面が通る相手ではなく、恐らくそれが洩くなればなるほど破員らは彼をながしにしたのではないか。

さらには、湧水だ。事故発生時の湧水量はわずか毎分3・5立方フィート(35・3立方フィート)一立方メートルだが、たとえ微量でもヤマを乱す元凶として馬鹿にできない。佐々木は一般坑内の大湧水に慣れすぎて、雀の涙ほどの水を、取るに足らないと見くびったのではないか。

状況は佐々木に全く不利だが、彼とて私以上に経験を積んだ技術者である。むぎむぎ、工法の常道や情勢判断を誤るはずがない。

私は不審に思い、工事日報を頼りに着工以来の経過を丹念に追った。

第一階梯は25メートルで、掘進の所要日数は12日である。第二階梯は6日で12メートルだ。ところが第三階梯は20メートルで、なんと17日もかかっている。能率にして約半減だ。

異常ともいえるペースダウンを疑って日報をめくると、第三階梯に入る直前の備考欄に、『組合長来所、立坑分会の結成大会開催』とあるのが目に飛びこんできた。さらにその欄外に、分会長以下労働、給与、会計、厚生、保安などの役付き部長名が記載されていた。坑外間接夫を除く坑内直接夫の配転者は、四八名である。その中から、一挙に八名の部長役員が誕生したのである。
(やっぱり……。やはりそうだったのか！)

私は、上矢田立坑着工時の、屈辱の日々をまざまざと思いだしていた。

情況条件は全く同じである。

ましてや第三階梯開始日の二月一日には、北炭夕張炭鉱でガス爆発事故が発生して四〇名の犠牲者が出ている。常務労組は急きょ「特別保安週間」を設け、全山に災害撲滅運動の指令を発している。それにも乗じた湯長谷立坑分会が、国鉄の遵法闘争にも似た減速意業にはずみをつけたのは想像に難くない。

三交代係員はいずれも破員あがりで、そのうちの二名は労組所属の准員、一名は雇員待遇の年輩職員である。三人とも内郷破からの配転者で立坑は初体験、破員らにはおるか仕事に潰しがきく者たちでは

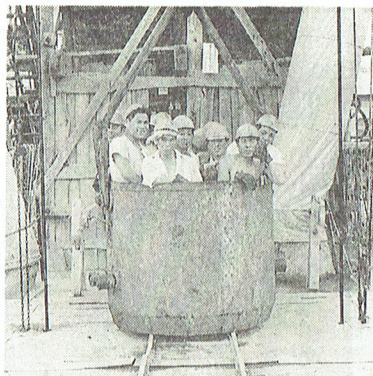
ない。

そうなると松岡と佐々木、特に工事の実権を握る主務者の佐々木が、労働攻勢の矢面に立たされたのは明らかである。

恐らく佐々木の神経は、技術的判断が狂うほどすり減ってしまったのではないか。

私には、悲痛なほどにひきつった彼の洗面が目に見えるようだった……。

6



さあいくぞ！ 先番と交代にキブルで入坑するヤマ男たち

二月二十七日、坑口真下で、仮スcaffoldingの最終的な組み立てが始まった。

実に手のこんだ宙吊り作業で、職工はもちろん、設計製作者らの目も血走っていた。

完成したのは二十八日未明で、直ちに高揚程ポンプ三台を装備して坑口を離れた。

見ればは武骨なつくりだが、急場しのぎは得意の、炭鉱技術の粋が結集している。木の床をきませながら危げなく降下して、間もなく水面すれすれの位置に据えられた。

水面は、妖しいほど青く澄み返っていた。
また、微動だにせず黙りこくっていた。

水と土砂を排除して、崩落部の上限位置に達したのは二十九日の夜である。
なんと崩落は、坑口下38メートルから始まっていた。すなわち、第二階梯の基底部が、半円ほど無残にもげ落ちていたのである。私と佐々木が脱出時に聞いた崩壊音は、まさしくそれだった。思いだして、また背筋が寒くなった。

崩落部は、約1・2メートルのショートステップシンキング工法（逆巻き工法）で進むという当初の方針が、再確認されていた。

つまり、人間が作業できる最小限の高さで崩落跡に潜入し、崩落ズリと充填土砂を排除しながら奥まで到達する。その後、コンクリートブロックを積んで空洞を充填しながら後退、立坑本体の仕上がり断面に沿ってそのステップを閉め切るというものである。足許が泥土で軟弱なため、奥に進む際は土のうと足場板を敷きつめ、その上に立柱して天盤を支える。

そうは言っても、天井の支持自体が問題だ。

初回のステップは地山が天井だが、第2段めからは、充填したばかりのコンクリートブロックが天井となる訳である。どんなに入念に施工したとしても地山とブロック群との密着は事実上不可能で、ごく微細な間隙は残るものと見なければならぬ。とすれば、はなはだ頼りない釣り天井で、まかり間違え

ば束になって圧死という惨事すら発生しかねないのである。

目地モルタルにしても、一樣に1センチの設計厚みを作るのは至難のわざで、施工のバラツキは免れない。また現場は制約が多すぎて、モルタルの理論的強度はおよそ期待できない。養生環境や養生日数など、強度発生の諸要件を満たせないばかりか、ブロック充填の翌日にはすぐその真下に潜入していくのである。さらには湧水の干渉も避けられず、施工の精度はかなり落ちると見込まなければならぬ。

それやこれや、充填ブロックが地山、またはブロック相互間で密着して、完全な一体構造物としてその自重を支えてくれるのかどうかとなると、はなはだ疑問だ。

また、どんなはずみで天井が落下してくるか分からない。こまめに立柱したとしても、ぶよぶよの土砂では不等沈下は免れないのである。考えれば考えるほど不安材料だらけで、頭が痛くなる。詮じ詰めれば事故も復旧方法も前代未聞で、安全性を立証するデータは何も揃っていなかったのである。

破業所や対策本部のお偉方と、私のような技術施工の尖兵とでは、情況把握や責任観、あるいは問題意識にかなりずれがある。お偉方は、やいのやいのと先を急かす労組にせつつかれ、それしかあるまいと見切り発車した感がないでもなかった。私はそれがベターだとは合意しながらも、対策決定の段階から大きな賭けに挑む緊張感と、薄氷を踏むような恐怖感が複雑に入り乱れて、明けても暮れても胸が痛んでいた。

何よりもヤマや湧水の挙動、そして目地モルタルに対する不信感が頭にこびりついて離れない。ひょ

つとして屋上屋を架す結果になりはすまいかと、ぎりぎりの段階まで小心翼翼としていたのである……。

初めて目にする崩落現場の異常さに、碓員たちは恐れをなして立ちすくんでいた。勝手な能書きは並べても、身を挺して先に立つ殊勝な者はいない。上下のぶ厚いゴムの合羽を着ているが、その合羽に泥がはねても顔をしかめるはずばらな連中である。汚れ役も危いテストパイロットも現場職制が引き受けなければ、彼らは動くものでなかった。

私は、人目を盗んで素早く片手拝みをしたあと、単身崩落跡に潜りこんでいった。片手拝みも、私のとっておきの呪いだ。

神でも仏でも何でもいいのである。一瞬の間、ただひたすら祈るということに没入するのである。霊験あらたかとは言い切れないが、それで救われた、大事にならずにすんだという体験は、思いすごしでなく何度もあったのである。

応援の支線係員らが、すぐ私にならった。定年間近のベテランだけに、支線係員の仕事は手早いもので、たちまち2メートル四方ほどの橋頭堡を築いてしまった。

へっぴり腰で、碓員らも動きだした。

「なんだ、その勾配は？。そうびくつくこたあねえ。もう、ヤマはおねえねしてんだ！」
応援者が、碓員らをどやしつけていた。

さすが、ヤマを見る目は確かで、余裕も貫禄もある。複雑な地圧理論や構造力学とは無縁だが、彼等

の素振りや仕事は、理論や数値以上の安心感を与えてくれる。段取りや碓員らのあしらいも巧みで、見ていると胸がすく。

間口は半円ほどだが、奥は扇形状に広がっていて、恐いほどだっぴろい広場になった。また層傾斜なりに天井が高くなった。林立する打柱を縫って幾つもキャップランプが揺れ動く内部は、異様な妖気さえはらんでいた。

四日ばかりで、ようやく第一段のステップを締め切った。充填に要したコンクリートブロックは、なんと1173個にもなった。

第二段は、いよいよ問題の吊り天井だ。

間口を広げず、放射状の一群縦隊となって潜入したが、私は終始不安と恐怖にさいなまれて、現場を放れることができなかった。

真夜中に二度ほど中食と小休止に昇坑はしたが、それもそそくさとすませて崩落跡にもぐりこんだ。使命感とか責任感とやらがそうさせる部分もあるが、極度の恐怖感の対象物の餌食にされやすい。怖いと思うほど、身も心も怖いものの本体に吸い寄せられていくという状態だったのである。

さしもの支線係員も緊張して、しきりに三交代係員や碓員らに檄を飛ばしていた。もはや応援者という立場を超えて、現場も碓員らも我が物として取り仕切っている。昔懐しい先山の、意地も気っ風も見られる思いだ。そのひたむきさと気迫に気圧されて、碓員らもいつしか真剣になって黙々と指示に従っていた。

第二段も四日を要した。これでやっと第二階梯の修復が終わった訳である。

(案ずるより、生むがやすい……!?)

そんな諺ことわざが頭を掠めだしたが、安心もそこそこだ。これはまぐれという気持ちが半分以上あって、安心立命という境地には程遠い。

ただ、目地モルタルの効用を、これほど肌身で思い知ったことはない。富配合のモルタルだが、使用直前にセメント硬化剤を混入して、それにすべてを賭ければ祈りもこめた。

なにやら神頼みばかり多くなつたが、試行錯誤の工法と心通わぬ碓員らが相手では、何事にも何物にも自然とそうなる。そして、

(釣り天井よ、天井よ。そのままそのまま、そつと動かすにいてくれ……)
と、絶えず祈つてもいたのである。

「どうやらうまくいきそうだな。長期戦だから、そう根を詰めんな。少しは息を抜け」
小林課長の頬も、ようやく弛んできた。

彼だけが私の労をねぎらってくれたり、私の仕事をフォローしてくれたりしていた。

碓員らの空キブルからの私的乱用を、私が身をもって戒めたときもそうだった。

保安規程では、ズリや材料を積んだキブルへの搭乗が禁じられていた。ところが碓員らは、交代時ならいざ知らず、ちょっとした小用もわざと大げさに扱い、単独ないし小人数でこまめに入昇坑を繰り返していた。そのたびキブルが占用されて、土砂搬出も材料搬入もお預けを食って作業が中断していたの

である。

崩落事故の引き金ともなった異常なベースダウンもさこそとうなずけたが、これ見よがしに面当てがましく見せつけられては、我慢がならない。

数日は腹の虫を押さえていたが、ついにたまりかねて、私はたぶたと泥水がだぶつくキブルにざんぶとばかり飛び込んだ。

係員や碓員らが、呆気にとられたのは言うまでもない。そんな間抜け面を睥睨へんげいして、私は胸まで泥につかりながら悠然と昇坑したのである。

それからというもの、私は毎度、材料を満載したキブルで入坑もすれば、崩落ズリの大塊にあぐらをかいたりして昇坑した。

何処の馬の骨かと鼻もひっかけなかった碓員らが、たちまちうさん臭い目を私に向けてきたが、そんなのは物の数でもない。労組でも誰でもいちゃもんつけんならつけてみると、私はすっかり開き直っていた。

堂々たる保安規程無視だが、案に相違して誰も何も言っていなかった。小林課長も何も言わない。私の違反搭乗を目撃しても、意味ありげにニヤリと笑っただけである。

そればかりか、間をおかず、小林課長自身が私にならidedした。さすがに泥水にはつからないが、材料や崩落ズリを積んだキブルで平然と入昇坑したのである。

問答無用と言わんばかりの率先躬行的な行動に、私はぐつと胸が詰まった。

結果的には、彼のキャリアや人徳が労組や破員らを黙らせ、私の一人芝居にならずにすんだ。無用な入昇坑が激減したばかりか、破員らも私にならなりましたのである。

副キャップの高木や機電係長は、出るも入るも小林課長と一緒に、長く坑内にいたためしはない。高木はもっぱら、事務所のストロブの前で大股広げ、労組役員を相手におだをあげていた。豪放らしくな巨漢だが、立坑にもぐると、借りてきた猫のようにすんだまっぴり大人しいのである。

労組役員らは、事務所の片隅で、ズブ濡れ泥まみれになって弁当を広げている私なんかには目もくれない。もちろん、私もそっぽ向いていた。彼らは口を開けば救出、救出とお題目をあげるが、私の脳裏にはヤマと吊り天井しがなく、救出なんて戯言たわ言でしかない。

寝ても覚めても、心はいつも釣り天井の下にもぐっていたのである。出勤は夕方の五時前で、帰宅は翌朝の八時すぎだから在宅時間はわずか八時間程度だ。言わば二、三番方の連勤をぶっ通し続けている訳で、家にいる間は泥のように正体もなく眠りこけている。

一家団らんどころか、子供たちの顔もろくに見ていない。会話もすでに断絶状態だ。妻はもちろん、子供たちまで鳴り音立てず息をひそめている。私が吊り天井に気を使うように、家族も神経を張りつめて、私の寝息や顔色をうかがっていたのである。

素掘り区間に入った第三段からは崩落範囲が拡大、第四段めでは充填ブロック数は実に3、085個にも達した。

釣り天井の恐怖は消え去らないが、工事は俄然活況を呈してきた。破員らも打って変わって顔付きを引き締め、私ら指揮班のペースに乗ってきた。もっとも彼等は、半数が入坑稼働、半数が坑外休憩所で休憩するという交代制だから、実働時間は四時間にもならない。いくらやっても余力を残しているはずだが、私の坑内実働は時間にして、連日破員らの三倍をこえている。その間はスリルと緊張で疲れも忘れているが、帰りはどうしようもないほど体が綿のように疲れ切って、自転車通勤の惨めさが日ごと骨身にしみてきた。

六段めからは崩落範囲が円錐状に尻すぼみとなり、目に見えて進行が早まった。

そして三月二十二日の夜、坑口下48メートルに達し、事故発生前に坑底から積みあがっていた築壁本ドッキング体に無事接合した。

崩落区間は、跡形もなく閉合された。

逆巻き工法のショートステップは計8段、充填ブロックは14、980箇にのぼった。立坑本体の築壁に換算すると、なんと312メートル分のコンクリートブロックを、わずか11メートルで消費してしまっただけである。

見上げれば、縦と横のブロック目地は整然としていて、何処から何処までが崩落跡なのか傷あとなのか分からない。まして、一人の命を奪ったほか、およそ一か月、人間たちの心胆を寒からしめたヤマは壁裏に隠れて、その素顔を窺うべくもない。

またコンクリートブロックの冷たい坑壁は、人間たちの苦勞も騒ぎも知らぬふりで、早くも他人行

儀で取り澄ましていた。

(わが事、終わる……)

最後のブロックを坑壁にはめ込んだあと、私は茫然とその場に立ち尽くしていた。精も魂も、閉め切った壁裏にすべて吸いとられ、もぬけの殻かぢになっていた……。

7

埋もれていたスカフォード(吊り足場)は、もはやスクラップでしかない。熔接機でずたずたに切断して、ズリや土砂とともに搬出した。残骸を全部排除し終えたのは二十三日の夜である。

その後は遺体の早期収容に関心が集中、俄然、坑内も坑外も騒然となってきた。事務所は、半ば労組関係者に占領された。

破員休憩所には、労組婦人部や内郷支部の主婦らが、入れ替わり立ち替わり陣中見舞に訪れた。その都度、破員らの動きは見違えるほどきびきびしたものになり、主婦らの前でゴムの合羽が颯爽とひるがえった。

二十四日の夕方、私が出勤すると、事務所の内も外もわんさと人集りがしていた。

「死臭がする。もう、すぐだな」

「いや、そんなら臭いはしねえよ。気のせいだっぺ。ンでも、時間の問題だべな」

臭う、臭わないで採めている連中もいる。いまにも遺体が出てきそうな騒ぎである。

交代のため昇坑してきた佐々木に聞くと、

「ン、少し臭うんだ。このまんまでは帰れねえ。俺も入坑して最後まで見届けっから」と言う。半ば昂奮状態だ。

彼は通常勤務に毛が生えたような昼番で、肉体的負荷は私よりずっと軽いが、事故当事者としてのストレスでげっそりやせていた。顔面も蒼白で、いつそう苦渋の色が深い。

そんな彼を入坑させる訳にはいかない。

「遺体が出たら知らせるから、休んでなよ」

私は彼をなだめて、すぐさま入坑した。

珍しく高木が、いち早く入坑して労組幹部たちとぐるを巻いていた。そのほか減多に入坑しない顔触れが、スカフォードや坑底の周壁に鈴なりになって目をぎらつかせ、仕事にもならないほど混雑していた。

そんな人熱れいそでは死臭においを嗅ぎようもない。

見れば足許の底盤は、虫食い状態に乱雑に掘りちらかしてあった。佐々木らは余程先を急いだのだろう。それにも眉をひそめたが、何よりも周囲の野次馬たちの鼻息の方が気になってならない。決定的瞬間を垣間見ようという好奇心もさることながら、遺体をついで昇坑し、坑口座張りを顔見せの晴れ舞台にしようという功名心や顕示欲が見え見えなのである。それがなんともさもなくば、私は、

「こうも混んでては、出る物も出やしねえ」

と、わざと大声で嫌味を言った。

「それもそうだわなあ、野木さん……」

小林課長がすかさずフォローしてくれて、早速野次馬たちを坑外に追っ払ってくれた。

崩落前の坑底までは、まだ3メートル以上もあった。底盤は崩落ズリが大半で、それら岩塊の隙間を投入土砂がびっしり埋めていた。

死臭など、何処を嗅いでもなかった。

私は、ピックを振りかざして一番槍を競っているような碓員らを、大声で制し、

「掘ればいいってもんじゃねえ。中央掘り下げを先行してから、順序よく周囲に向かって切っつけていけ。慌てることあねえ」

と一喝、本来の掘進方法に戻した。

死ぬ思いで魔の釣り天井を脱したが、それまでが私の正念場で、あとは言わば付けたりだ。だが碓員らは、ここきてやけに英雄気取りで肩を怒らした。何を今更と苦々しく思わない訳にはいかず、それが私の語気や気持ちを少なからず刺々しくさせていた。

結果的には私の正攻法が正解で、二番方では遺体は現れず、大勢の野次馬たちが坑外で待ち呆けを食った。発見されたのは三番方の午後十一時三十分である。

奇しくも事故発生から、ちょうど一か月めの同じ時間帯だ。なにやら因縁めいた暗合が、次第に私の

口も気持ちも重たくしていった。

遺体は坑底から1・5メートル上部の東側、つまり隣接の基地側のコンクリートブロックの壁に、逆さになってへばりついていてた。保安帽は吹き飛ばされて、頭と顔半分が壁にひっついてひしゃげていた。そっと土砂を取りのぞき、壁から体を引き剥がすと、ラグビーボール大の黒い染みが壁に残った。

組合幹部らが、先を争って入坑してきた。

あとはもう、私が出る幕はなかった。

出ようにも、たちまち人垣からはじき出されて、ついには黒い染みの壁際まで吹き寄せられてしまった。そしてその場から動きもならず、黙って傍観するしかなかったのである。

俺の出番だとばかり、高木が巨体を利用して人ごみを掻き分け、輪の中央で大声で采配を振っていた。労組幹部らも、ここを先途とさかんにくちほしをいれている。あつという間の主役交替劇である。

遺体はキブルの縁に渡した足場板に寝かされて、静かに昇坑した。両側の隙間に、労組役員らがすし詰めになって付き添った。

坑口真下あたりで、キブルの縁を叩くかん高い金音がした。もう坑口だぞという死者への呼びかけで、坑内からその靈魂を追い払う呪いでもある。

金音の余韻も消えぬうち、大きな音を立てて坑口ドアが閉じた。慣習に従えば、「もう坑外だぞう。

迷わず成仏しよう」と、付き添い人が叫ぶはずである。それは坑底では知るよしもなかったが、死者の片耳は壁に押しつぶされて、無残に塞がれていた。叫んだとしても、聞こえたかどうか……。

私は、泥まみれの坑壁を碓員らに水洗いさせた。しかし楕円形の黒い染みは、洗えば洗うほどくつきりと浮きだした。顔の脂がコンクリートにしみこんだのだろう。

持て余した係員が、「モルタルで塗り込めましょうか」と、私に聞いてきた。

「いや、もういい。そのまんまでいい。」

私は、強く頭を振って中止させた。

壁面を伝わり落ちる湧水で、それは鈍い光沢を放ってぬめぬめしていた。私には、罹災者が壁はもう懲り懲り、塗りつぶされるのはいいやいやと、言い張っているようにも見えたのである。

係員や碓員らは、その黒い染みを忌まわしい物でも始末するかのようにごしごとこすっていたが、洗い落とすべきは彼らの人間的染みだろう。それほど崩落事故発生の根は業が深く、罹災者だけが貧乏くじを引いたような気がして哀れでならない。

結果的には二次災害がなくてすんだが、牢固たる技術的確信を持って取り組んだ訳ではない。私にしてもが文字どおり片手拝みで明け片手拝みで暮れた毎日で、それが神か仏に通じてやっとな事無きを得たという思いが強いのである。技術的にはなんとも後ろめたくて、

(果たして人間たちは、こんな程度で、ヤマに向かっていいのだろうか……?)

と、寝覚めも悪ければきまりも悪かった。

見まいとしても目はひとりでに黒い染みに吸い寄せられ、最後の昇坑となったキブルの中でも、見え

なくなるまでそれに釘づけになって放れなかった。

わずかの距離だが、崩落区間の闇が重苦しくよどんでいて、やけに疎ましかった。

キブルはぐんぐんとはずみをつけてせり上がっていくが、体が異常に重たい。目に見えない何かが、重しのように体にまとわりついたみたいでもあった。

坑口を出て外気に触れた途端、一度に重しがとれ、全身の力がどっと抜けていった。

坑外は何処もひっそり閑、事務所は見事なほどぬけの殻だった。

湯の岳おろしの空っ風が吹き荒れていた。

立坑槽も凍えて、夜空で貧乏ゆすり……。

投光器もほとんど消された寒々とした構内の捲き上げドラムがガラゴロンと気の無い音を立てて空回りしていた。

明け方、自転車の荷台に作業服や保安帽を積んで、私は一人寂しく立坑を離れた。

とめどもない疲労感と虚脱感で、ベダルを踏む足に力が入らない。さしもの喧嘩モグラの命運も燃え尽きたか、ハンドルさえろくに切れず、何度もよろけながら蹠蹠として家にたどりついた。

翌朝まで、泥のように眠りこけた。

『たったの一晚だけでいいんです。夜の時間に、お父さんを休ませてあげたいのです……』

娘の作文の一節だが、実にか月ぶりで、やっとな夜の眠りにありついたのである。

現場ではともかく、後半は家で惑乱状態に陥って、理由もなく家族に当たりちらしていた。子供が鬼

か蛇のように私を怖がれば、妻はおろおろ、はらはら。ついには、「いくら非常事態でも、これではあんまりひどすぎる」と、子供のように泣きべそをかいた。

親は親の、子は子の神経が家じゅうに張りつめて、わが家もその間はまさしく深刻な非常事態に陥っていたのである。

遺体の収容がこれほど待たれた例がない。

だが家族ぐるみで一日も一刻も早くと、身を切る思いで祈り続けたのは、遺族は別として私の家族のほかにはいなかったのではなからうか。

Ⅲ 決死敢闘

1

悪夢のような、地獄の応援だった。

夕方までは昏睡状態だったらしい。だが、一か月ぶりの夜は、寝酒がききすぎたのか釣り天井の夢にうなされてか、七転八倒の異常な眠りだったと妻が言う。

絶えず、けもののように呻き続けていたそう。そうかと思うと突然大きな寝言で、誰かと、何かと喧嘩を始める。寝言だけならまだしも、手も足も暴れたらしい。

そのせいか、夜が明けても夢うつつで、体のどこにも力が入らない。意識ももうろうとして、起きる気力さえ湧かなかった。

一夜にして、身も心も腑抜けになった。

航空士官学校の野外演習、「決死敢闘」にも似た、まさに地獄の応援だったのである……。

昭和十九年二月、私は県立磐城中学校の四年から陸軍予科士官学校に入学、翌二十年二月には早くも航空士官学校に進んだ。